

新しい学力観で授業はどう変わるか

静岡大学教授 馬居 政幸

これからの教育では単なる知識・技術の詰め込みではなく、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成をめざす新しい学力観が求められているが、実際の授業はどう変わらなければならないか。

「自ら課題を見付け、自ら考え、主体的に判断したり、表現したりして、よりよく解決することができる資質や能力の育成」。

「子供一人一人が豊かなよさや可能性をもち、それを発揮しつつ、主体的、創造的に生きることができる資質や能力の育成」。

いずれも新しい学力観についての記述である。子どもの教育に真剣に取り組んでいる教師であれば、このような学力観に反対する方はおられないはず。「新」に「真実」の意味を付加して、「真学力観」と称される理由である。その意味で、新学力観を構成する個々の要素は、けっして新しいものではない。むしろ教育の理想としては古典的ともいえる¹⁾。

では、何が新しいのか。2点指摘したい。

その一つは、この言葉の広がり方。少し大げさにいえば、日本の教育史上はじめて被教育者である子どもたちの支持により広がった教育改革の総称が「新しい学力観」と考える。

今回の指導要領改訂時に当初提示されたキーワードは「個性尊重」や「変化への対応」であった。他方、「新しい学力観」という言葉は、学習指導要領に続く指導要録改訂の際に、その基本方針である「新学習指導要領が目指す学力観にたった教育の実践に役立つ評価」を「新しい学力観の定着をめざす評

価」と縮めて使ったことが起源とされる。「新しい学力観」は、昭和40年代の「教育の現代化」や、昭和50年代の「ゆとりと充実」と異なり、意図的に文部省が提示した言葉ではない、というわけである²⁾。

思うに、いかなる改革も現場の支持がなければ進まない。学習指導要領の現場とは、いうまでもなく授業の場、子どもと教師の間に創造される世界である。

子どもの育ちと学びにおける確かな手応えが教師の授業改革への意欲を生み出し、その子どもと教師の変化が施策の正しさを確証させ、マスコミもそれを肯定的に報道せざるをえなかった。これが当初の意図を越えて、「新しい学力観」が、現代の教育改革の方向を総称するとともに、積極的に評価する言葉としてここまで広がった理由と考える。

では、どのような変化が授業の場に生じたのか。「教師が教室で教科書を教える」というこれまでの授業の前提条件が、「子どもたちが多種多様な活動と体験を創造しあう場」に再構成されたことである。これが「新」の二つ目の理由であり、日本の学校教育のあり方を大転換させる試みと考える。

具体的には、次の四つのレベルにおいて授業の変化を指摘できよう。①教える前に子ど

もの見取りを、②教科書中心から活動や体験重視へ、③教室から出て多様な学習の場へ、④教師の指導からさまざまな人たちの支援へ。

ただし、この四つのレベルは、授業づくりの段階ではない。むしろ、一定のパターンにしたがって実践すれば理想的な授業ができるという授業観から教師が自由になって、子ども一人ひとりが自己の多様な特性を自在に表出できる場を創造し続けること、これが新しい学力観が要求する授業と教師のあり方のポイントと考える。その意味で、すべては子ども見取りから始まる。

見取りの“場”を創ることから

子どものモノの見方や考え方、あるいは個性や発達度は、一般的で普遍的なものとしてあるのではない。個別的で具体的な行動の過程にしか現れえない。さらに、それは一人ひとり異なるものであり、時と場と相手により変化するものでもある。一つひとつの活動のなかで見えてくる子ども一人ひとりの姿の積み重ねのなかには、その子にとっての「見方や考え方＝個性やその育まれる過程（発達特性）」は見いだせない。

また、子どもは一人であるわけではない。子どもの現れは多様な人とのかかわりのなかで生じる。とりわけ教師の期待に応じて行動する傾向が強いはず。子どもの現れと教師の指導・支援（かかわり方）や予想（とらえ方）は、相互に影響しあう関係にある。

指示待ち症候群という言葉がある。何事も指示されなければ行動できない若者を揶揄する言葉である。その原因に家庭のなかの過保護があげられる。だが、教室のなかも例外ではないはず。教師の指導が丁寧であればあるほど、子どもは自ら考え工夫する意欲を失って、教師が教える答えを待つようになっていまいだらうか。

したがって、子どもを見取るための第1の課題は、変化流動する子ども個々の多様な現れを保障する“雰囲気”と“機会”という二

うまい・まさゆき 1949年徳島県生まれ。東京教育大学大学院博士課程退学。静岡大学教育学部助教授を経て現職。主著に「なぜ子どもは「少年ジャンプ」が好きなのか」明治図書、「地域における生涯学習の課題」静岡県出版文化会、がある。

つの“場の創造”。まず、“雰囲気”づくりの基盤は子どもたちを“ほめる”こと、彼ら彼女らが自分を表現することに“自信”を持てる学級づくりがその第一歩といえよう。また、子どもたちの“自信”は具体的な“活動の過程”で生じる。子どもが発揮できる力の多様性は、活動の“機会”の多様性次第である。

新学力観が子どもの“よさ”を育むことを重視し、“活動や体験”の必要性を強調する理由である。

多様な学習の場へ

子どもの見取りの第2の課題は、教師としての自己評価である。これまで、この年齢の子どもはこのような見方・考え方をするからこんな活動や教材を準備して、という前提で授業づくりを行ってこなかったか。もし、授業過程において、自分の予想（指導案）どおりに子どもが考え行動していると自負する教師は、新学力観にもとづく限り、自己の子ども観や指導のあり方を問いなおすべきである。

冒頭に列記したように、新学力観の目的は「自ら課題を見付け、自ら考え、主体的に判断したり、表現したりして、よりよく解決することができる資質や能力の育成」にある。他方、子どもの見方・考え方は教師の常識と異なるはず。子どもは大人とは異なる世界に生きる異文化の住人、“大人の常識の世界（ヒト・モノ・コトの定義＝自己と生きる場の見方・考え方）”とは“異質な見方・考え方を生ずる存在”だからである。

このような観点から、子ども一人ひとりに応じて、その子なりの見方や考え方を十二分に表現できる“機会”と“雰囲気”を用意することができたかどうか。これを改めて問う

ことから自己評価を進めてほしい。

ところで、一般に異なる世界の住人の理解、異文化理解において最も重要なことは、その現れの背後にある“生きる世界”とセットで理解することといわれる。子どもの場合も同様であろう。子どもの生きる世界は、学級の教室のなかだけではない。家庭や地域あるいは情報空間といった学校外の世界で、学び育っている。そこで培った見方・考え方を見だし評価することが、子どものとらえ方やかわり方を問いなおすためのもう一つの課題である。新学力観が活動や体験とともに、教室のなかから出て多様な学習の場を求めて、家庭や地域との連携を重視する理由である。

一人ひとりに応じた支援を

では、教師は活動の場を用意すれば、すべてを子どもにまかせて、ただ観察するだけでよいのか。もちろん、そうではない。このことに関して、伊豆の伊東市立南小学校の佐藤久美子先生の子どもの見取りと、それにもとづく実践への反省の言葉を紹介したい。「本番に強い子、っているんですね。その時は悔しくて、あの普段の姿はなんだったんだって。でもうれいんですけど。逆に、この子は大丈夫だ、と思ったら大体失敗します。グメだともイイともきめずに、今日はどうかな、と思いながら毎日子どもたちに接しているんです。どんな良い子にも波がありますし。心配な子どもがいても、すぐ手をうたずにじっと待つんです。時にはすぐ声をかける場合もあります……。あんまりはっきりいえないんですけど、この子には今すぐいわなければ、あるいはこっちの子にはしばらくまってみよう……って……なんか矛盾するみたいなんですけど……」⁹⁾

子どもは活動の過程で、自己の力を適切に評価できなくなる場合がある。ほめることがかえって、その子の可能性の芽を摘む場合もある。自分の意欲と実力のズレに気づかせ、努力したり工夫したり教わったりしなければ

ならないことを自覚させることがあってこそ、それまでにないその子どもの力が現れることも忘れてはならない。

子どもたちがそれぞれ自分の意欲を自由に発揮できることが大前提。その意欲を、その子なりの結末に結ばせるための努力や工夫の意欲に転化させることができるかどうか。これは教師の子どもへのかかわり方、すなわち指導と支援のあり方にかかっている。

ただし、それは指導か支援かという言葉の定義の問題ではない。重要なのは、子ども個々の特性とその子どもの行為が生じる社会的状況(時と場合)に即した対応を、教師が臨機応変にとることができるかどうかである。

その際の判断と具体的な子どもへのかかわり方の困難さと醍醐味を象徴するのが、佐藤先生の「なにか矛盾するみたいなんですけど」という表現ではないか。そして、新学力観が、このように曖昧ではあるが、一方で子ども個々の個性を伸ばしつつ、他方で確実にその子どもに即した力を育むために、最も必要な教師のかかわり方を示す言葉として、“指導と評価の一体”という観点を加味して、あえて“支援”という言葉提起した理由と考える。

子どもにとっての知識の意味を

ところで、先に新しい学力観という言葉の起源が、指導要録が提示した評価観にあることを指摘した。この指導要録が提示した観点別学習状況にもとづく評価に対して、客観性に乏しく、教師の主観に陥りやすいとの指摘がある。さらに、このような意見は、新しい学力観は基礎・基本となる知識を軽視している、という批判と結びつきがちである。

だが、主観性を危惧し共通する知識の教授を重視する人も、子ども一人ひとりの顔が異なるように、個性や能力もすべて等しいとはいわないはず。子どもの多様性が前提であれば、知識を全員に確実に教えるためには、その指導案と教授方法は一人ひとり異なるはず。この子ども個々の状況に応じた指導と支援の

あり方を要求するのが新学力観にもとづく授業づくりであることは明らかであろう。

新しい学力観は子どもが知識を学び取ることを軽視しない。逆である。知識が個々の子どもに即して確実に学び取られることを最も重視するのが新学力観にもとづく評価規準である。その知識は学習指導要領に明確である。

逆に教えこむことに急で、その知識が子ども一人ひとりにもつ意味と価値を問うことを避けてきたのが、旧来の授業ではないか。事前に教科書のなかにストックされた概念中心の知識を、学習主体の状況にかかわらず、教師の側が一方的に教授(伝達)した結果を、子どもにとっての意味と価値を問うことなく、知識の理解度(記憶量)により評価(序列づけ)すること、これが客観性の名のもとに行われてきた指導と評価ではないか。

繰り返すが、知識が子ども個々に即して確実に理解され、彼ら彼女らの日常生活に展開されるまで追いつけること、これが新学力観が求める知識理解と評価と考える。そして一人ひとりに応じる以上、教師の子どもへの思いに支えられた見取り、すなわち主観がその基盤にある。その意味で、新しい学力観は客観的な基準ではなく、主観的な規準に貫かれたものである。だが、人間が人間に働きかける行為から主観を排せばいずれかが機械になる。それは教育という行為ではなくなるはず。

客観性を求める教師の意識のなかに、子ども一人ひとりに応じた授業の創造とその結果に対する評価の責任を一人で担うことを忌避する主観が潜んでいないだろうか。

ただし、上記のような新学力観にもとづく授業づくりを、教師一人の力や学校のなかだけで実践することは不可能である。何よりも子どもが必要とする知識は学校のなかだけでは学べない。学校のなかで学んだ知識も、学校の外で生かされてこそ本当の知識である。

加えて、子どもたちが何のために学ぶかを問い直してほしい。学校のなかではなく、学校の外で自立することが目的のはず。だが、

学校には、学校でしか通用しないルールや知識が存在しないか。学校に適應すればするほど実社会の生活から離れる面がないだろうか。

生きて働く力という言葉を使用する教師自身が、学校の外の世界にどれほど適應しているか。一人の人間として生活するうえで学校の知識はどれほど有効であろうか。新しい学力観にもとづく授業改編は、学校の外の地域社会や家庭生活の改編に支えられることによってこそ、その目的は達成可能である。そしてこの地域や家庭の改編を可能にするのが、学校週5日制であることを強調しておきたい。

最後に、活動や体験重視が、ともすれば経験主義的教育観や高度経済成長以前の日本社会の慣行と混同されがちであることに付言しておきたい。新学力観が求める活動や体験とは、過去への郷愁ではなく、21世紀を担う子どもたちの関心・意欲・態度を育むものでなければならない。ティーム・ティーチングに代表される新たな学習方法の開発や高度情報機器を駆使する情報リテラシーの育成が、新しい学力観にもとづく授業を展開するうえで不可欠な要因であることもまた強調しておきたい。

〈参考文献〉

- (1) 文部省『小学校教育課程一般指導資料 新学力観に立つ教育課程の創造と展開』東洋館。
- (2) 菱村幸彦「新しい学力観とカリキュラム改革」『教育学研究』第62巻第1号。
- (3) 馬居政幸「新しい学力観で子どもの見方を変える」『総合教育技術』1994年11月、小学館。

—DATA

子どもの“よさ”を育む四つの“みる”

①「見る」——教師が自己の子どもと親や授業観を一度白紙にもとして、謙虚に子ども一人ひとりの多様な現れに学ぶこと。②「観る」——一定の学習課題を追求する立場から子どもにかかわること。③「診る」——子ども一人ひとりに即した課題や問題を解決する立場からかかわること。④「看る」——その子なりの成長を見守りながら支え替えること。(詳細は参考文献(3)を参照。)

III 柔軟化をめざす教育の課題

課題19	教育における規制緩和をどう考えるか	浅野 素雄	88
課題20	親に学校を選ばせる政策は有効か	黒田 則博	94
課題21	フリースクールは認められるか	小澤 周三	98
課題22	家庭における義務教育履修を認めるべきか	結城 忠	102
課題23	学習指導要領のあり方をどう考えるか	菱村 幸彦	108
課題24	英才教育をどう考えるか	松村 暢隆	112
課題25	脱学校論は学校教育に何を投げかけたか	平沢 茂	116

IV 新しい学校経営の課題

課題26	週5日制時代の学校観はどうあるべきか	岡田 忠男	122
課題27	学校週5日制に対応する学校経営はどうあるべきか	西 穰司	126
課題28	学校を開かれたものにするにはどうするか	有園 格	130
課題29	児童の権利条約を学校経営でどう生かすか	下村 哲夫	134
課題30	児童・生徒が安心して過ごせるために学校経営はどうあるべきか	滝 充	138
課題31	不登校問題に対応する学校経営はどうあるべきか	江川 玖成	142
課題32	外国人の子どもの教育をどうするか	村田 翼夫	146
課題33	教育情報の公開にはどこまで応ずるべきか	菱村 幸彦	150
課題34	ティーム・ティーチングをどう生かすか	上寺 久雄	154
課題35	オープン・スクールを生かす学校経営はどうあるべきか	加藤 幸次	158
課題36	教育におけるノーマライゼーションはどう進むか	細村 迪夫	162
課題37	教育委員会の活性化をどう考えるか	高倉 翔	166

V 学校教育の基調の転換

課題38	教育基本法の改正をどう考えるか	高橋 史朗	172
課題39	学校週5日制でカリキュラム基準はどう変わるか	星村 平和	176
課題40	新しい学力観は不易か流行か	安彦 忠彦	180
課題41	新しい学力観で授業はどう変わるか	馬居 政幸	184
課題42	学校教育で創造性を育成するにはどうするか	恩田 彰	188
課題43	学校教育で個性を生かす教育をどう進めるか	次山 信男	194
課題44	マルチメディアは授業を変えるか	佐賀 啓男	198
課題45	教育情報ネットワークは学校をどう変えるか	永野 和男	202
課題46	教育における平等と効率をどう両立させるか	熊谷 一乗	206
課題47	わが国の社会は学歴社会か	岩木 秀夫	210
課題48	高校格差の是正は是か非か	耳塚 寛明	214
課題49	なぜ受験競争はなくなるのか	有本 章	218
課題50	偏差値依存からの脱却は可能か	竹内 克好	222
課題51	学校は学習塾にどう対応すべきか	深谷 昌志	226
課題52	私立中学校ブームをどう考えるか	牧野 禎夫	230
課題53	高校入試制度はどう変わるか	徳武 靖	234
課題54	大学入試はどう変わるか	池田 輝政	238

VI 主要国における教育改革

課題55	アメリカの教育改革はどう進展しているか	金子 忠史	244
課題56	イギリスの教育改革はどう進展しているか	小松 郁夫	248
課題57	フランスの教育改革はどう進展しているか	藤井佐知子	254
課題58	ドイツの教育改革はどう進展しているか	坂野 慎二	258

変化の時代の学校教育全課題 [6巻] 菱村幸彦(国立教育研究所長) 監修

Ⅰ 変化の時代の学校像 (編集) 菱村 幸彦
—生涯学習社会への移行 (5月発売)

Ⅱ 変化の時代の学校経営 (編集) 高階 玲治
—社会の変化と経営戦略 (7月発売) (国立教育研究所室長)

Ⅲ 変化の時代の教育法規 (9月発売) (編集) 菱村 幸彦

Ⅳ 変化の時代の学力観 (編集) 有園 格
—次代を拓く教育課程 (11月発売) (日本教育新聞編集局長)

Ⅴ 変化の時代の教師像 (編集) 佐藤 全
—新しい指導力と研修 (1月発売) (国立教育研究所室長)

Ⅵ 変化の時代の子どもたち (編集) 梶原 康史
—環境の変化と子どもの変容 (武庫川女子大学教授)

[各巻日5判250~300頁/2300円(税込)]

Ⅶ 変化の時代の学校経営—社会の変化と経営戦略
●7月25日発売予定!!

★B5判・150頁・1100円

Ⅰ 変化の時代の学校教育全課題 [6巻] ★5月25日刊
—生涯学習社会への移行 (監修・編集) 菱村幸彦 (国立教育研究所長)

〔執筆〕一顧不同
〔監修・編集〕菱村幸彦 (国立教育研究所長)

I、新しい改革の視点/II、新しい時代の学校制度/III、柔軟化をめざす教育の課題/IV、新しい学校経営の課題/V、学校教育の基調の転換/VI、主要国における教育改革 (以上五八課題)

〔執筆〕一顧不同
秦政春・福岡教育大/新井都男・上越教育大/佐藤三郎・大阪経済法科大/黒羽亮一・学位授与機構/山本慶裕・国立教育研究所/池田秀男・安田女子大/瀬沼克彰・宇都宮大/伊藤俊夫・東京家政大/川野辺敏・常葉学園大/木村力雄・東北大/新堀通也・武庫川女子大/小玉武俊・聖徳大/鳥津忍・国士館大/中西昭・教育調査研究所/菊地榮治・国立教育研究所/亀井浩明・帝京大/館昭・学位授与機構/淺野素雄・芦屋女子短期大/黒田則博・広島大/小澤周三・東京外国語大/結城忠・国立教育研究所/松村暢隆・関西大/平沢茂・文教大/岡田忠男・東洋大/西澤司・上越教育大/有園格・日本教育新聞/下村哲夫・筑波大/滝充・宮崎大/江川政成・東京学芸大/村田翼夫・筑波大/上寺久雄・聖徳学園岐阜教育大/加藤幸次・上智大/細村迪夫・群馬大/高倉翔・筑波大/高橋史朗・明星大/星村平和・帝京大/安彦忠彦・名古屋大/馬居政幸・静岡大/恩田彰・東洋大/次山信男・東京学芸大/佐賀啓男・放送教育開発センター/永野和男・鳴門教育大/熊谷一乗・創価大/岩本秀夫・日本女子大/耳塚寛明・お茶の水女子大/有本章・広島大/竹内克好・埼玉県民活動総合センター/池田輝政・大学入試センター/金子忠史・国立教育研究所/小松都夫・国立教育研究所/藤井佳知子・宇都宮大/板野慎二・国立教育研究所

変化の時代の学校教育全課題・1

変化の時代の学校像—生涯学習社会への移行 目次

生涯学習社会のなかの学校像……………菱村 幸彦・1

I 新しい改革の視点

課題1	これからの教育改革の視点は何か……………	佐藤 三郎・4
課題2	臨教審答申は日本の教育をどう改革したか……………	黒羽 亮一・8
課題3	生涯学習の概念をどう考えるか……………	山本 慶裕・14
課題4	生涯教育と生涯学習はどう違うか……………	池田 秀男・18
課題5	生涯学習体系のなかで生涯学習支援システムはどうあるべきか……………	瀬沼 克彰・22
課題6	生涯学習時代の児童・生徒の資質・能力を育む学校のあり方は……………	伊藤 俊夫・26
課題7	生涯学習社会は学校をどう変えるか……………	川野辺 敏・32
課題8	義務教育の考え方はどう変わるか……………	木村 力雄・36
課題9	学校に対する批判をどう受けとめるか……………	秦 政春・40
課題10	日本の学校はどう評価されているか……………	新井 郁男・44

II 新しい時代の学校制度

課題11	20世紀の学校と21世紀の学校はどう違うか……………	新堀 通也・50
課題12	6・3制はこのままでよいか……………	菱村 幸彦・56
課題13	幼稚園と保育所は一元化できるか……………	小玉 武俊・60
課題14	小学校教育はこのままでよいか……………	鳥津 忍・64
課題15	中学校教育はどこをどう改めるべきか……………	中西 朗・68
課題16	高校教育改革はどこまで進展するか……………	菊地 栄治・72
課題17	6年制中等学校をどう考えるか……………	亀井 浩明・76
課題18	大学の改革はどこまで進むか……………	館 昭・80

教職研修

H7-6

変化の時代の
学校教育全課題
No.1

変化の時代の学校像 生涯学習社会への移行

変わりゆく社会と教育を考える視点

監修・編集 菱村幸彦
(国立教育研究所長)

- I 新しい改革の視点
- II 新しい時代の学校制度
- III 柔軟化をめざす教育の課題
- IV 新しい学校経営の課題
- V 学校教育の基調の転換
- VI 主要国における教育改革

菱村幸彦 / 佐藤三郎 / 黒羽亮一 / 山本慶裕 / 池田秀男 / 瀬沼克彰 / 伊藤俊夫 / 川野辺敏 / 木村力雄
 秦政春 / 新井郁男 / 新堀通也 / 小玉武俊 / 島津忍 / 中西朗 / 菊地栄治 / 亀井浩明 / 館昭 / 浅野素雄
 黒田則博 / 小澤周三 / 結城忠 / 松村暢隆 / 平沢茂 / 岡田忠男 / 西穂司 / 有園格 / 下村哲夫 / 滝元
 江川政成 / 村田翼夫 / 上寺久雄 / 加藤幸次 / 細村迪夫 / 高倉翔 / 高橋史朗 / 星村平和 / 安彦忠彦
 馬居政幸 / 恩田彰 / 次山信男 / 佐賀啓男 / 永野和男 / 熊谷一乘 / 岩木秀夫 / 耳塚寛明 / 有本章
 竹内克好 / 深谷昌志 / 牧野楨夫 / 徳武靖 / 池田輝政 / 金子忠史 / 小松都夫 / 藤井佐知子 / 坂野慎二

教育開発研究所

教職研修 No.1 変化の時代の学校像 生涯学習社会への移行

教職研修 六月増刊号

平成七年六月一日発行臨時増刊号
昭和四十七年十月二十六日 第三種郵便物認可

発行所 教育開発研究所
 発行人 内田和雄
 編集室 東京都文京区本郷三丁目一丁目
 編集人 山本慶裕
 編集 千二二三 電話三八一五七〇四二代
 郵便振替 東京 八一二五四五一番

FAX (03) 381-6124
 定価 2300円(本体2130円)

教育開発研究所

教委・学校の選択がいま当社編に集中

下記「解説と展開」は、全巻の豊富な実践性がいま各地で高く評価されています。ぜひ指導計画と授業の展開にご活用ください!!

内容の特色

●「解説と展開」全巻の編集視点は、今後90年代の具体的授業展開に長期活用されることを最重点においている。

●全体計画、学年・学級指導計画、指導案のほか、改訂点は逐一、授業展開の実際に位置づけて理解の徹底を図った。

●改訂点につき、新旧指導要領の「比較対照表」を明示し、移行措置の扱いにも要点を示した。

●全巻、新指導要領作成の直接担当官が、改訂点を授業の実践にどう活かすか、を内容上のテーマとして書き下した。

●90年代の長期活用にぜひお備えください。

教育開発研究所

〒113 東京都文京区本郷3-5-2
 ☎03(3815)7041代 振東9-125451

【文部省小学校課長・中学校課長編】
新指導要領の解説と記入
 (小学校編) (中学校編) 各A5判1300円(税込)

【文部省小学校課長・中学校課長編】
新指導要領(中・小)
 付●2色刷記入見本 ●55年指導要領

●2色刷 300頁
 ●55年指導要領

●2色刷 300頁
 ●55年指導要領

【文部省小学校課長・中学校課長編】
新学習指導要領全文(中・小)
 と要点解説(付・新旧比較対照表)

【文部省小学校課長・中学校課長編】
新教育職員免許法と教員養成・研修

●2色刷 360頁
 ●55年指導要領

●2色刷 360頁
 ●55年指導要領

